

# 濃度20倍の抗がん剤 副作用抑える投与方法

岡山理大など開発

岡山理科大学の浜田博喜教授と岡山大学の研究チームは、抗がん剤を従来の20倍という高濃度でがん細胞にだけ届ける薬物送達システム(DDS)

を開発した。副作用を抑え、治療効果も期待できる。今秋にも企業と組んで臨床試験(治験)を始める計画だ。

リポソームと呼ぶ微小カプセルを使う。直径は160〜180ナ(ナは10億分の1)で、界面活性剤を加えながら、抗がん剤「タキソール」をカプセルに包むと、1ミリの中に20〜30ミリの濃度で入った。

乳がんの化学療法で使われる点滴薬でも同30ミリを投与する。点滴では効き目はあっても正常な細胞にも薬が届くため副作用が起きる。

DDSではリポソーム表面にがん細胞に特有のたんぱく質を認識する抗体を付けており、がん細胞だけに抗がん剤が集まる。副作用を減らせるといふ。

人間のがん細胞を移植したマウスでは、DDSががん細胞に集まっていく様子が確かめられた。

台湾かフランスのバイオ系企業と組み、今秋から治験を開始したい考えだ。

「科学技術」は月曜日に掲載します。